



北京の中心部から東に車で20分ほど走ると、ギャラリーなどが集まる「798芸術区」がある。国有企業の廃工場跡で若いアーティストが創作活動をし始めた2001年頃は、前衛的な雰囲気も漂っていたが、政府公認の芸術区となつて、すっかり観光地化された。

そこを抜け出したアーティストたちが創作拠点を構えるのは、「798」からワンブロック離れた新たな芸術区「草場地」。その一角にある現代写真写真センター「三影堂撮影芸術中心」に4月17日、約2千人もの人が集まった。世界的現代写真フェスティバル「アルル国際写真祭」と

共催の写真祭「草場地春の写真祭2010」の開幕式が始まろうとしていた。三影堂を中心として、29カ所で開催される展覧会と、国内外から前線で活躍するキュレーターや写真家を招いてのシンポジウムやトークセッション、批評家に作品を売り込むフォトフォ

リオレビューなど写真祭のプログラムは立体的だ。日本からは中国でも人気の高い森山大道氏や、岡山直哉氏、荒木経惟氏の展覧会が企画された。シンポジウムに招かれた東京都写真美術館の事業企画課長・笠原美智子氏は驚いていた。何より

歴史の検証を目的とするコレクショナルや作家の発表の場や交流を促す企画展といったコマースャルギャラリーとは対極の運



榮榮(右) & 映里。ふたりで作品を発表して10年。今月から深圳の何香凝美術館で回顧展が始まる

世界的な写真祭を北京の地で

# 写真の力を信じるふたり

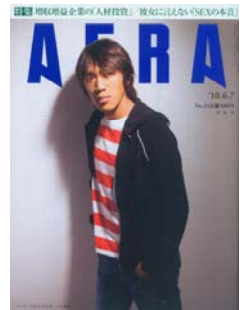
世界の大国となった中国で、世界的写真祭が開催された。引き寄せたのは写真の力を信じるふたりの使命感だった。

## アルル初の国外展

40年の歴史を持つアルル国際写真祭が、初めての国外開催の地に北京の草場地を選んだ理由はいくつもある。今年が中仏文化交流年であり、草場地が世界的に注目されていること、優れたキュレーターにしてプロデューサーとして中国現代アート界に精通するフランス人、ペレニス・アングレミーの存在など。これらに加えて大きな吸引力を持つのが、三影堂なのである。

楽しい雰囲気には仕上がっているところがすごい。これだけのことを民間レベルでやってしまえるのが今の中国なんですわね」

中国側の主催者は三影堂撮影芸術中心と思想手企画。三影堂は、「榮榮&映里」のユニットで欧米を中心に高い評価を受ける現代写真家、中国人の榮榮と日本人の映里が07年、中国内の現代写真への理解や教育の仕組みが変わらないことを危惧し、私費で開設した。開幕式では、中国の若い写真家に贈る第2回「三影堂撮影賞」の授賞式も行われた。



## 写真

「この写真センターができたあがつた時、こんなすごいもの、どうしようって、心配でたまらなかつた。今回だつて40年の歴史を持つアルルが3年しか経つてない僕らと一緒にやろうと言うのも、驚くしかないよ」  
不慣れながら企業への協賛依頼にも自分たちで回つた。フランス政府からも協賛は得たが、

外からは順調に見えるかもしれないけど問題だらけだよ——  
榮榮は苦笑した。  
「この写真センターができたあがつた時、こんなすごいもの、どうしようって、心配でたまらなかつた。今回だつて40年の歴史を持つアルルが3年しか経つてない僕らと一緒にやろうと言うのも、驚くしかないよ」  
不慣れながら企業への協賛依頼にも自分たちで回つた。フランス政府からも協賛は得たが、

菅方針は、国内外の現代アート界から敬愛を集める。アーティスト自らが運営をしているのは世界的にも稀だ。若手写真家の発掘や育成に向け、暗室や印刷紙などを提供する。海外から撮影に来た写真家のためのレジデンスも備える。  
設計は2人の古くからの友人である世界的現代アーティスト、アイ・ウェイウェイ。図書館、ギャラリー、シンポジウムが開ける空間を備え、入場は無料だ。2人のほか、ニューヨークの現代アートの美術館でキュレーター経験のあるアメリカ人、ハーバード大学で現代芸術史を学んだ中国系アメリカ人など11人のスタッフで運営する。全体を掌握しているのが、榮榮だ。  
「有問題」



壁つたいに作品を見ていくと「ぐるぐると迷宮を巡ったあとに世界を再発見する感覚になれば」というアイ・ウェイウェイの目論見にはまる

赤字らしい。  
**近代化への静かな批判**  
榮榮は1968年、福建省の農村で生まれた。兄弟はみんな成績優秀なのに一人だけ勉強嫌い。絵を描くことが好きで美大に進みたかつたが、なかなか合格できずいたある時、村の写真館で借りたカメラで妹を撮つた。教えられるままに現像して現れた映像は、まさに自分が描きたい絵だつた。  
「写真を知つてもすごく自由

になつた」(榮榮)  
92年、3年働いて貯めた3万円を持って北京に出てきた。改革開放に向かつて変化のただ中にある都市の空気を思いつき吸いながら、芸術家が集まる北京東部の東村に暮らした。だが、作品を発表する機会は無。生活のために映画のスクリーンや映画館の宣伝写真を撮りながら、96年から仲間と手織りの雑誌「新撮影／NEWPHOTO」を作り始めた。わずか30部を美術館や大使館関係者に届けるう

ち、少しずつ海外の現代アート関係者にも知られていく。  
3年後、榮榮の日本での展覧会場を訪れた映里との運命的な出会い。映里は委託カメラマンとして勤めた新聞社の出版部を3年で辞め、写真を撮つて生きていこうと思いつめていた。ふたりは作品を通して惹かれ合う。帰国後、榮榮が片言の英語で国際電話をかけ続け、映里は9カ月後北京を訪れる。  
ふたりが激動の北京で撮つた作品には圧倒的な強さがある。そのひとつが取り壊される家を撮つた一枚だ。海外から帰国したある日、自宅が開発で取り壊されることを知つた。すでに取り壊しが始まつた家の門の上いっぱいに盛られた白いカサブランカの間に座るふたり。人びとの暮らしを取り残して猛スピードで進んでいく近代化への静かな批判と、壊されていく穏やかな暮らしへの惜別が満ちている。

**再開発で取り壊し危機**  
自分たちが被写体として映り込んで表現する榮榮&映里の作品は欧州や米国で注目を集めた。中国現代アートの存在感が高まる中、発表の場は瞬く間に世界に広がつた。写真によって言葉や国を超えて人と人がつながり

理解し合うことを体験した。  
映里は中国に暮らして10年。はじめは榮榮の田舎から親戚がひっきりなしにやって来ては住みついてしまうことに面食らつた。誰でも受け入れ分け隔てのない榮榮を通して家族が社会の基本だと知り、「三影堂は息子、働くスタッフは家族」というふうに変つた。オフィスの壁にはまだ更地だつた敷地で現場の労働者たち30人と撮つたポートレートがかけられていた。  
インタビュウの途中、窓の外から小さな頭が覗いた。5歳を筆頭に3人の息子が今は父と母とともにレンズに映る。  
草場地は危機にある。開幕式の前日、村役場から再開発のための取り壊し通知が届いたのだ。榮榮はこう解釈する。  
「都市部の拡大を目指す政策は10年も前につくられていて、この10年で草場地が芸術区として発展したことを行政は知らない」  
展覧会を訪れたフランスの文部大臣は、草場地の芸術区としての価値を中国の文部大臣と議論することを約束したという。  
写真の力が試される試練の時、写真祭に訪れた大勢の人たちが地図を片手にギャラリーを巡る姿がふたりに励まししている。

ライター 三宅玲子 (北京)